

100歳を迎えたリーダビリティ研究：その誕生から最新動向まで

野本忠司

国文学研究資料館・総合研究大学院大学

nomoto@acm.org

要旨

リーダビリティ研究とは文章の読み易さを数値で捉える「指標」の開発を目指した学問であるが、その歴史は意外に古く、今からほぼ100年前の1920年頃に米国で産声を上げた。文体分析に計量的な手法を取り入れた研究は、早くは19世紀末に現れるが、いずれも純粋に学問的な関心に根付いたものであり、社会の衆目を集めるような存在ではなかった。しかし、20世紀の初頭に起きた革命、戦争などの大きな社会変動、混乱が、大量の人口の移動を誘発し、リーダビリティ研究を要請する環境を出現させた。ヨーロッパから米国に移民、難民が津波のように押し寄せ、彼らを教育する上で適切な教科書を選ぶことが切実な問題になったのである。決して、リーダビリティ研究が学問的に重要であると認識されたからではない。

第2次世界大戦の最中においても、兵士に対する正確な情報伝達の必要性から、リーダビリティに関する研究は盛んに行われ、1950年頃には現在でも広く用いられているFlesh-Kincaid, Fox, Gunningなどの指標が誕生した。リーダビリティ研究の隆盛を支えたのは戦争であったと言っても過言でない。

リーダビリティ研究はその後、現在に至るまで大きなパラダイムシフトを経験している。本講演ではその内容と、変革を後押しした社会的、学術的な背景を解説する。講演後半では、研究の最新動向とリーダビリティを用いた応用事例をいくつか紹介する。